

真実の終わり？ ——21 世紀の現代思想史のために

星野 太 (東京大学大学院総合文化研究科准教授／美学・表象文化論)

概要

ポスト・トゥルース (post-truth) という言葉が聞かれるようになって久しい。2016 年、イギリスの欧州連合離脱をめぐる国民投票 (6 月 23 日) やアメリカ大統領選挙 (11 月 8 日) が行なわれたこの年、オックスフォード大学出版局はこれを「2016 年の言葉 (Word of the Year 2016)」に選んだ。その定義をみると、ポスト・トゥルースとは「**公共の意見を形成するさいに、客観的な事実よりも感情や個人的信念に訴えるほうが影響力のある状況を述べたり、示したりする**」言葉であるという。以来、この言葉をめぐってさまざまな研究書や論文が書かれてきたことは周知の通りである。その内容は「ポスト・トゥルースの政治」をめぐる実証的考察から、21 世紀になって勃興したソーシャル・メディアとの相関を示す統計的調査までさまざまだが、それらとともに目につく、ある気がかりな言説がある——すなわちそれは、**20 世紀後半に流行をみせた「フランス現代思想」こそが、今日のポスト・トゥルース状況を準備した**というものである。いったいなぜ、そのような言説がまことしやかに広がっているのか。また、その内容ははたして妥当なものであるのか。本講義ではこれらのことについて概説的にお話ししたい。

0. 導入——『現代思想』2021 年 6 月号 (特集「いまなぜポストモダンか」)

1. ポスト・トゥルースとは何か

オックスフォード大学出版局の「2016 年の言葉」／ トランプ時代と「真実の終わり」

2. ポスト・トゥルースの系譜学

文献紹介 / 伝統的メディアの凋落とソーシャルメディア / ポストモダニズムの影響

3. 「フランス現代思想」の罪？

ポストモダニズムの批判者たち / フレンチ・セオリー / 「真実の終わり」に抗して

0. 導入

・ 20 世紀後半における「現代思想」とは何であったのか

ポストモダン／ポスト構造主義／フランス現代思想／脱構築主義……といったさまざまな名称

・ 『現代思想』2021 年 6 月号——特集「なぜいまポストモダンか」

(Cf. 拙稿「ポストモダンの幼年期——あるいは瞬間を救うこと」)

1. ポスト・トゥルースとは何か

- ・ オックスフォード大学出版局の「2016 年の言葉」

「ポストトゥルース (post-truth)」という現象が一躍大衆の注意を引いたのは二〇一六年十一月、オックスフォード大学出版局辞典部門がこの単語を二〇一六年の今年の一語にノミネートしたことに始まる。単語の使用が二〇一五年に二〇〇〇パーセントという急激な上昇を見せたことを考えると、明白な結果に思える。リストに残ったほかの候補には「オルタナ右翼 (alt-right)」や「ブレグジット主義者 (Brexiters)」などもあり、この年の政治的な状況がはっきり示されていた。すべての意味を含んだ語として、「ポストトゥルース」が時代を捉えていたように思われる。

二〇一六年のブレグジット投票とアメリカ大統領選挙の特徴、つまり、あやふやな事実、論証におけるエビデンスの基準の棄却、明白な嘘といったものを前に、多くの人は仰天してしまった。もしドナルド・トランプが、自分が選挙に負けるとすればそれは不正操作のせいだろうと——確たる証拠もなしに——主張できていたならば、もはやそのとき事実や真実は重要ではなくなっていたのではないかと [マッキンタイア (2020) : 15-16]

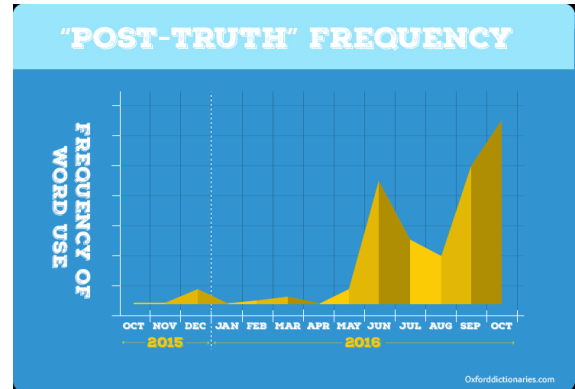


図 1 (Oxford Languages, Word of the Year 2016, <https://languages.oup.com/word-of-the-year/2016/>)

ポスト・トゥルースとは、「公共の意見を形成するさいに、客観的な事実よりも感情や個人的信念に訴えるほうが影響力のある状況を述べたり、示したりする」形容詞のこと。

Post-truth is an adjective defined as ‘relating to or denoting circumstances in which objective facts are less influential in shaping public opinion than appeals to emotion and personal belief’.

ポスト・トゥルースという概念は過去十年間のうちにすでに見られたものだが、今年オックスフォード辞典は、イギリスの EU 離脱をめぐる国民投票や、アメリカの大統領選挙といった文脈のもとで、この言葉の使用頻度が急増するさまを目撃した (図 1)。それはまたポスト・トゥルースの政治といったフレーズのように、特定の名詞と結びつくことにもなった。

The concept of *post-truth* has been in existence for the past decade, but Oxford Dictionaries has seen a spike in frequency this year in the context of the EU referendum in the United Kingdom and the presidential election in the United States. It has also become associated with a particular noun, in the phrase *post-truth politics*.

[Oxford Languages, Word of the Year 2016, <https://languages.oup.com/word-of-the-year/2016/>]

- ・ トランプ時代と「真実の終わり」

真実と理性に対する攻撃は、トランプ政権の発足一年目に米国で熱狂的な水準に達した。それは何年も前から右翼急進派の間で勢いづいていた。反クリントン主義者たちは九〇年代にヴィンス・フォスターの死をめぐる突拍子もない告発を捏造していた。病的に疑り深いティーパーティー派は二〇一六年の選挙期間中、ブライトバード・ニュース・ネットワークのプロガーやオルタナ右翼のトロールと手を結び、環境保護派が住宅の室内温度や購入できる自動車の色を制限しようとしているなどと主張した。**トランプが共和党の推薦を勝ち取り、さらに大統領に選出されたことで、その最も極端な支持者たちの過激な考え方——人種的・宗教的な不寛容、政府に対する憎悪、陰謀論と誤報を奉じる姿勢——が本流に躍り出たのだ。** [カクタニ (2019) : 19-20]

すべてが四散し、もはや中心はなく 解き放たれた無秩序が世界を覆う (イエイツ『再臨』)

Things fall apart; the centre cannot hold; Mere anarchy is loosed upon the world (W. B. Yeats, *The Second Coming*).

一九一九年に第一次世界大戦の瓦礫の中で書かれたイエイツの詩『再臨』は、二〇一六年に再び広く読まれることになった。二〇一六年前半にニュース記事に引用された回数は、ここ三〇年間で最高だったのだ。 [カクタニ (2019) : 19]

2. ポスト・トゥルースの系譜学

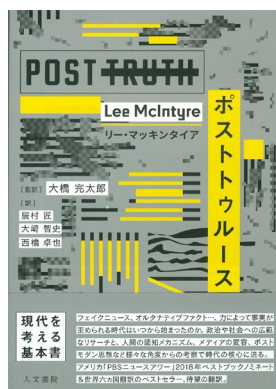
- ・ 文献紹介

Lee McIntyre, *Post-Truth*, Cambridge, MA: The MIT Press (Essential Knowledge series), 2018.

(リー・マッキンタイア『ポストトゥルース』大橋完太郎監訳、人文書院、2020 年)

Michiko Kakutani, *The Death of Truth: Notes on Falsehood in the Age of Trump*, New York: Tim Duggan Books, 2018.

(ミチコ・カクタニ『真実の終わり』岡崎玲子訳、集英社、2019 年)



リー・マッキンタイア『ポストトゥルース』
大橋完太郎監訳、人文書院、2020 年

ハンナ・アーレント『全体主義の起源』(1951)、ジャック・デリダ『嘘の歴史』(1997)などの再論

→ 「嘘」の概念や全体主義をめぐる哲学的考察、さらには文学作品への注目 (Cf. オーウェル『一九八四年』)

・ 伝統的メディアの凋落とソーシャルメディア

科学への攻撃 (e.g. 1950 から 90 年代のタバコ産業研究委員会によるキャンペーン)

認知バイアス (「……が真実であってほしい」「愚かさを自覚できない愚かさ」)

伝統的メディアの凋落とソーシャルメディアの台頭 (e.g. SNS のフィルターバブル)

・ ポストモダニズムの影響

ポスト・トゥルースの原因としてのポストモダニズム？

- ① 60 年代：アメリカにおける「フランス現代思想」……ジョンズ・ホプキンス大学でのシンポジウム (1966)
- ② 70 年代：ジャック・デリダの「脱構築 (déconstruction)」理論……イエール大学を中心とする「学派」の形成
- ③ 80 年代：ジャン＝フランソワ・リオタール『ポストモダンの条件』(1979)……「ポストモダン」理論の伝播

フランス現代思想／脱構築／ポストモダニズムへの通俗的イメージ

- ① あらゆるものについて、唯一ではなく複数の答えがある (相対主義)
- ② 真実は存在せず、すべては解釈にすぎない (ニーチェ由来の遠近法主義)

[大橋 (2020) : 229]

Jean-François Lyotard (1924-98)

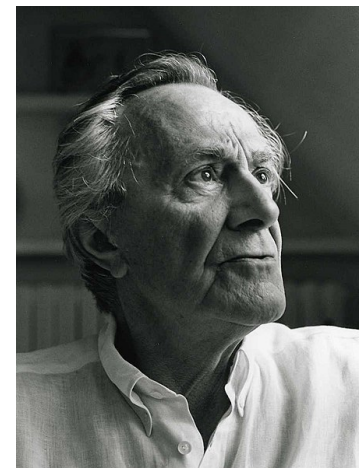


Photo by Bracha L. Ettinger from Wikimedia
[CC BY-SA 2.5](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Jean-François_Lyotard.jpg)

〔いわゆるポストモダニズムの〕思想家たちの理論は、俗物化された産物として大衆文化に浸み出し、大統領の擁護者に乗っ取られてしまった。彼らは、その相対主義的な主張を、大統領の嘘を弁明するために用いようと欲したのだ。右派はそれを、進化論に異議を唱えるため、気候変動の現実を否定するため、もう一つの事実を売り込むために使った。[カクタニ (2019) : 35-36]

3. フランス現代思想の罪？

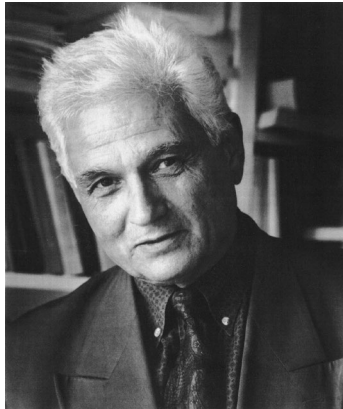
- ・ ポストモダニズムの批判者たち

強い批判——ポストモダニズムのレトリックはそれ自体、トランプのものと同型である（＝ゆえに有責である）

脱構築主義者は難解な表現が満載の文章と曲芸的にひねくれた構文を使うことを好み、使われる用語の中には「テキストの不確定性」「知のもう一つの方法」、言葉における「言語的不安定性」などがあるが、**それは勿体ぶった形とはいえ、トランプの側近が近年、彼の嘘、豹変、不誠実な約束について言い訳する際の文言と似たものがある。** [カクタニ（2019）：46]

弱い批判——ポストモダニズムのレトリックは、トランプの詭弁が生じる余地を生んだ（＝ゆえに有責である）

ポストモダニストたちに、自分たちの観念がどう誤用されてきたかについて完全に責任があると言いたいわけではない。たとえ彼らが、**現実の評価において事実が重要だという考えを密かに傷つけ、そのことが引き起こす被害を予見しなかったことについて、なにがしかの責任を認めなければならないとしても。** [マッキンタイア（2020）：166]



Jacques Derrida (1930-2004)

Paul de Man (1919-1983)

© 2013 Jorge León Casero y *Philosophica*.
Enciclopedia filosófica *on line*
<http://www.philosophica.info/archivo/2013/voces/derrida/Derrida.html>



ポール・ド・マン『ロマン主義のレトリック』山形和美・岩坪友子訳、法政大学出版局、2014 年

- ・ フレンチ・セオリー

批判者たちの「ポストモダニズム／脱構築主義」＝「フランス現代思想」？

デリダには謎の側面がある。彼の作品がわかりづらいのは確かだが、それよりもなお謎めいているのは、彼のアメリカにおける、そして世界における聖典化という現象である。〔……〕以後、とどまることを知らないアメリカの文学界は、一筋縄ではいかないデリダの思想を大学の教養課程の教科書に収めるだけでは飽き足らず、それ

をかつてない認識論的・政治的探求のプログラムへの変容させてしまった。哲学の国と言われるフランスで一人の高校生がデリダを一冊読んでいるのに対して、アメリカでは乏しい哲学教育にもかかわらず一人がデリダの本を一冊通読しているという事態がどのようにしたら生じるのか。[キュセ (2010) : 94-95]

[……] イェール大学の英文科で教鞭をとる四人の偉大な批評家たちは、七〇年代終わりにデリダの脱構築の受け入れ先となり、アメリカにおける脱構築信仰の公認の社^{やしろ}を築き上げることになる。その結果、当人たちは否定しているにもかかわらず、文字どおり「イェール学派」なるものの存在が一般的に認められるようになった。[……] その四人とは、ポール・ド・マン、ハロルド・ブルーム、ジェフリー・ハートマン、J・ヒリス・ミラーである——彼ら四人組は両義的な姿勢に加え、非党派的で、友愛による結びつきを重んじる伝統破壊論者^{イコノクラスト}であるが、それと同時に、非政治的で、テキストに対する唯物論者であり、文科保守主義者でもある。いかなるものであれ新興のグループには反論がつきもので、一九七五年にはイェールの「解釈学マフィア」を告発する批判の声が上がった。[キュセ (2010) : 101-102]

批判者の主張

ポストモダニズム／脱構築主義こそがポスト・トゥルースの遠因である

強い批判 (カクタニ)

弱い批判 (マッキンタイア)

いずれも米国において変異した「フレンチ・セオリー」に基づいている

フランス現代思想／脱構築／ポストモダニズムへの通俗的イメージ

- (1) あらゆるものについて、唯一ではなく複数の答えがある (相対主義)
- (2) 真実は存在せず、すべては解釈にすぎない (ニーチェ由来の遠近法主義)

これに相当する言説を、リオタールやデリダのテキストのなかに見つけることはできない

(カクタニの場合、明白な政治的意図のもとに誤読や批判を行なっているふしがある)

- ・「真実の終わり」に抗して

〔……〕 **ポストトゥルースを促進させる要因だと言われるのが、ポストモダニズムによって導入されたと言われる「多視点主義」である。**ニーチェの用語で遠近法主義といわれるこの考え方は、視点に応じて事実の解釈がいかようにも変わりうるというものであり、ニーチェに由来してフランス現代思想にまで影響を与えている。この主張は、異なる解釈が視点に応じて複数成立することを唱えるものであり、所与のテキストからその主張と異なる見解を引き出す脱構築的主張も、こうした遠近法主義の一形態であると考えられるだろう。／ところが、デリダの事例においてすでに見たことだが、**脱構築においては、脱構築された「解釈」とその由来元となったテキスト、すなわち「真理」とは、つねに緊張関係に置かれている。**〔大橋 (2020) : 246〕

さしあたりの結語

——「フランス現代思想」が今日のポスト・トゥルース状況を準備したという言説は、それ自体が明白な根拠を欠いているか、意図的な印象づけを行なっているという意味で、まさしくおのれが批判する「ポスト・トゥルース的状况」を反復することになってしまっているのではないか。

カクタニの著書の Amazon カスタマーレビューなどに、ド・マンへの個人攻撃（「親ナチス的な媒体で反ユダヤ主義な記事を書いていた」といった疑わしい事実）や「わたしも脱構築思想には昔から違和感があり、本書を読んで腑に落ちました」といった類いのコメントが多々見られるのは、その典型的な現象と思われる。

——さらにつけ加えるなら、「フランス現代思想」における戦略としてのレトリックを、ポスト・トゥルース的状况を準備したものとして（一緒に）批判することの論理的帰結は、文学において顕著な言語の修辭的機能（アイロニーやユーモア）のすべてを、学術的領域から排除することであろう。

カミュ『異邦人』アメリカ版への序文 (1955)

嘘をつくとは、ありもしないことを言うことにはとどまらない。それはむしろ、現にあるよりも多くのことを、さらに人の心について言えば、おのれを感じるよりも多くのことを言うことである。〔Camus (2016) : 215〕

Mentir, ce n'est pas seulement dire ce qui n'est pas. C'est aussi, c'est surtout dire plus que ce qui est et, en ce qui concerne le cœur humain, dire plus qu'on ne sent. (Camus)

引用文献

Camus, Albert, « Préface à l'édition universitaire américaine », in *Œuvres complètes*, tome. 1, Paris. Gallimard, 2006.

Cusset, François, *French Theory : Foucault, Derrida, Deleuze et Cie et les mutations de la vie intellectuelle aux Etats-Unis*, Paris, La Découverte, 2003.

(フランソワ・キュセ『フレンチ・セオリー——アメリカにおけるフランス現代思想』桑田光平ほか訳、NTT 出版、2010 年)

Kakutani, Michiko, *The Death of Truth: Notes on Falsehood in the Age of Trump*, New York: Tim Duggan Books, 2018. (ミチコ・カクタニ『真実の終わり』岡崎玲子訳、集英社、2019 年)

McIntyre, Lee, *Post-Truth*, Cambridge, MA: The MIT Press (Essential Knowledge series), 2018. (リー・マッキンタイア『ポストトゥルース』大橋完太郎監訳、人文書院、2020 年)

大橋完太郎「解釈の不安とレトリックの誕生——フランス・ポストモダニズムの北米展開と「ポストトゥルース」」、リー・マッキンタイア『ポストトゥルース』大橋完太郎監訳、人文書院、2020 年、225-256 頁。

星野太「ポストモダンの幼年期——あるいは瞬間を救うこと」『現代思想』2021 年 6 月号、青土社、22-31 頁。